

《巻頭言》

大学における研究と研究推進戦略

理事・副学長（研究・地域連携・就職担当）伊藤 宏

福島大学は平成 31 年 3 月に研究推進戦略を策定いたしました。この研究推進戦略の序文には、「研究者の多様な発想に基づく研究および個々の研究の独立性を最大限に尊重するとともに、地域とともに歩む大学として、地域の課題や社会の課題を解決するための基礎から応用までの幅広い研究を推進するために、福島大学研究推進戦略を策定する。」とされています。更に、「研究資源の効果的な配分」、「地域・社会への研究成果の分かりやすい発信と情報共有」、「若手研究者・女性研究者の育成と支援」、「研究ネットワークの拡充」、「外部資金獲得の推進」の五つの戦略が挙げられています。

まずは、研究推進戦略の序文を読み解いてみます。研究者の多様な発想に基づく研究は、「研究の多様性」を意味します。この「研究の多様性」とその次の「研究の独立性」は大学での研究において、最も尊重すべきことであると考えます。大学の研究者の研究が研究者個人の意思や良心に反して、別の方向に強制的に向けられることはあってはならないことです。研究者の自らの意思に従って「真理の探究」を行うことを何人も妨げることはできませんし、そのようなことがあれば、その社会は極めて不健全なものと言わざるを得ません。

かつては、「〇〇大学は研究の多様性と独立性を尊重し、真理を探究する」というような研究に関する表明をすれば、それで充分であったかもしれません。もちろん、その研究は違法ではなく公序良俗に反しないという条件が付きます。しかし、この表明は戦略というべきレベルのものではないでしょう。そもそも、戦略とは組織の目的やビジョンをどのように達成するのか、そしてそのために有限な資源をどのように効果的に配分するか、と理解することが出来ます。ということは、大学という組織の目的やビジョンは何なのかをまずもって考えなければいけません。

私が福島大学に赴任した 30 年以上前には、大学や学部の目的やビジョンを大学構成員が共有していたとは言い難かったです。私立大学においては、もともと建学の精神のような大学が進むべき指針がある場合が多いですが、国立大学においては、大学や学部の目的やビジョンは、法人化の前にはあまり意識されることはありませんでした。法人化によって、国立大学は「大学経営」ということを強く意識することになりましたし、それぞれの大学の存在理由やアイデンティティを明確にする必要が生じました。それに加えて、国の財政状態が厳しいため、国からの運営費交付金も必ずしも十分なものではなく、その使い道に関して、運営費交付金の源である税金を支払っている納税者・国民に対しての説明責任を厳しく求められるようになりました。

このような状況の下で、各国立大学はそれぞれの大学独自の理念や将来構想という形で、大学の目的やビジョンを提示することになりました。福島大学でも「地域と共に歩む人材育成大学」として自らのアイデンティティ・ミッションを明確にしました。このような動きに対応する形で、多くの大学で研究推進戦略が策定されました。つまり、戦略を策定する大前提の組織の目的やビジョンがやっと明確になり、この大学の目的やビジョンを達成するための戦略に取りかかることが出来たわけです。

研究推進戦略の序文の後半の「地域とともに歩む大学として、地域の課題や社会の課題を解決するための基礎から応用までの幅広い研究を推進する」という文言は、この福島大学のミッションを強く意識したものです。研究の方向性がある程度決まれば、次にそのための資源の効果的配分（傾斜配分と言ってもいいです）が行われることとなります。地域の課題の解決に繋がるような研究に研究費を積極的に配分しようという試みは、福島大学重点研究分野「foR プロジェクト」などとして展開されています。

福島大学の五つの研究推進戦略の最後に「外部資金獲得の推進」が挙げられておりますが、これは共同研究・受託研究などの形で外部資金を積極的に獲得することを示しています。国の財政難から国立大学への運営費交付金が減少する中、大学自らが積極的に外部資金を獲得し、大学の財政基盤を強めようということに加えて、大学が個々の教員（研究者）に配分する基盤的な研究費が年々少なくなり、そのために自分の研究に必要な資金は自分で稼ぎなさいということの表明です。もちろん、外部資金の獲得に対しては、URA（大学の研究マネジメント人材）等が積極的に支援するという体制を構築しつつあります。

これらの動き自体は、今の国立大学の現状を考えれば当然のことでしょう。しかし、老婆心かもしれませんが、少々心配なことがあります。お金を稼ぐ研究や、すぐに役に立つ研究が良い研究で、そうでない研究は軽んじられるという風潮になりはしないかということです。「科学」とは普遍的原理を発見することであり、大学の研究者（科学者）の第一の任務は普遍的な原理を発見することであると、私は考えております。しかし、普遍的な原理の発見よりもむしろ、一定の法則を利用して「役に立つもの」を作って、実用化に繋げるための「技術」に大学における研究がシフトしようとしているのではないかということです。近年、大学での研究においても「社会実装」が強く意識されるようになってきました。「社会実装」とは研究成果を社会問題解決のために応用、展開することを意味しますが、大学には直ぐにそして直接的には社会問題の解決には繋がらないような研究も多くあります。これらの研究が長期的に見れば人類の進歩や世界の平和に貢献するということは十分に考えられます。

短期的観点と長期的観点、基礎研究と応用研究の適切なバランスを保ちつつ、それと同時に大学のミッションを遂行していくための研究を推進していくことは、簡単ではないことを痛感する今日この頃です。